
マレビトの樂園

山下しんか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マレビトの楽園

【Nコード】

N4670Z

【作者名】

山下しんか

【あらすじ】

ふと気がつくと、幸田命司は見知らぬ廃墟に居た。それまでは、ごく普通に貧乏生活を送っていた苦学生だったハズなのだが。天をあおぎ見ればうらかな日差し。

目の前には狐顔の人物と、ロリ巨乳でとがり耳の少女。

そして、デカイ氷に包まれている自分。

凍えそうな寒さの中、それまでの経緯を思い出した命司は、どうやらここが異世界である事を理解する。

秘法と呼ばれる超常の力が当たり前にある面白そうな世界で、命司

はしかし莫大な借金を背負わされ、なし崩し的に目の前の二人の元で働く事となるのだが……。

短編と連載間違えてたので再掲しました。ご迷惑おかけして申し訳ありません。

序章 狐男と妖精女

??そう、貴方は言霊あなたことだたま使いなのですか??

??ふふ、ひどい世界なのですね、そちらは??

??なら、いつそこちらにいらっしやいませんか？ 良いところで
すよ、こちらは??

??分からない？ そう、貴方には分からないかも知れませんね??

??でも大丈夫だいじょうぶ。私が、まるで貴方の意志であるかのように、導い
て差し上げますから??

??私？ 私の名は??

気がつくと、幸田めいじ（こうだ）一命司は瓦礫がれきに埋もれるようにして、
椅子に座っていた。

頭上には抜けるような青空が見えるが、そこはまぎれもなく建物
の中だ。瓦礫は、倒壊した装置と屋根、それから壁の一部。そして、
その瓦礫の山の中にはテーブルと椅子があり、差し向かいにはつい
さつき出逢であったばかりの女たちの顔がある。

一人は真紅しんくの髪の妖精っぽい少女。

そしてもう一人は、モロにキツネ顔で立派な尻尾しっぽまで生やした姉
似の人物。

現在、命司はどういうワケか、氷の塊かたまりの中から顔だけ出している

という異常な状況にある。

他方、『彼女たち』に視線を向け、こうして陽の光の下で見ると、一人？？姉かと思ってしまった者は、似てはいるが、どうも違う様子だと思えた。狐のような頭上の耳はたまに動いているし、面差しも姉より中性的だ。着ている服は、日本の神主が着ている狩衣みたいな感じで全体が緩やかだが、それでもその体格は男っぽい気がした。

そしてもう一人？？女の子、と思った人物も、尖った耳が時折動くし、チャイナドレス？？というより、ベトナムのアオザイみたいな服に、その小さな体躯を包んでいる。どれを取っても目を引くが、その小さな背丈に比して胸が大きいのが、何よりも特徴的だ。

(ロリ巨乳……)

思わず、そんな四文字が命司の脳裏を掠める。

そんな命司の視線を感じたのか、女の子は汚いものでも見るかのような視線を向けて、胸元を両腕で隠した。

と、不意に姉似的キツネ顔が話しかけてくる。何語かもさっぱり分からない言語で。

だが、言葉は分からないものの、一つだけ確信した事がある。キツネ顔の声質は、女のものではなかった。つまり、少なくともそのテの方々から男寄りの存在だろうと思う。とはいえ、まだ明確には分からないが。

ただ、どちらにしてもこのままでは埒があかない。いずれにしてもコミュニケーションは大切だ。そう思い、命司は口を開いた。「いや、分かんないって。つか、もし万が一姉貴のイタズラとかだったら、マジで許さないからな？」

いくら天才でオタク趣味で『腐』属性を持っているだろうしようない姉でも、多分ここまで凝ったイタズラはしないハズだ。そうは思っているけど、命司はあの姉に関して、いつでも『万が一』を考えてしまう。

すると、キツネ顔はしばし考え込み、やがてどこから出したもの

か、一本の細く尖^{とが}った氷みたいな棒を手にした。それを鉛筆のように持って、命司の顔に近づけてくる。

「お、おい、何する気だよ？」

ゆっくりゆっくり、テーブルに身を乗り出して命司の『眼』に、その尖った先端を近づけてくるキツネ顔。命司は何をされるかわからない恐怖を感じつつも、精々が顔をそむける事しかできない。

が、それも??

「うわぁ！ やゝめえゝろぉー！」

命司は思わず叫んだ。いつの間にか背後に回った女の子が、その小さな体^{たいく}軀からは想像もつかない怪力で、命司の頭を固定したのだ。左目に迫る棒の先端。その恐怖に耐えきれず、命司は両目を固くつむった。すると、

（なんか……書いてる?）

ひんやりとした、細く固い感触が^{まいた}瞼の上を走り回る。固い先端で書かれているので微かに痛むが、痛みを与えるのが目的ではなさそうだ。そして、両の瞼が終わると、今度は左右の耳たぶをなぞっていく。それから耳が終わると、今度は唇から^{のど}顎（あご）、一喉にかけてなぞっていった。

そして??

「おい、聞こえとるか? 言葉分かんねやったら、眼え開けてみい」
そんな声が聞こえ、同時に頭の固定が解かれた。

（か、関西弁?）

命司はゆっくりと瞼を開いていく。

「やった! さっすがマイスター! だゝい成功ゝ!」
右手すぐ傍^{そば}から、今度は女の子が理解出来る言葉を紡^{つむ}いだ。
「ねえねえ、キミ、どこから来たの?」

女の子はテーブルに上半身を乗せると、命司の顔を覗き込んだ。長く、そして尖^{とが}った耳の先が、好奇心を表現するように上下に動く。着ている物はアジア風だが、その姿は命司に西洋の妖精を連想させた。

だが、

「しゃしゃり出てくんな、このロリが」

不意にキツネ顔はそう言うと、女の子を一睨^{にら}みする。そんな狐男の様子に、女の子は不満そうな表情を見せた。

「ロリじゃないよお。マイスター、あたしが二十三だって知ってるじゃん」

「そのナリで言うても説得力皆無やろが。とにかく黙っとれ。やつと話通じるようになったんや、脱線さすな」

どうしてか不機嫌な様子の狐男。精々が小学六年生程度にしか見えない傍^{かたわ}らの女の子が、二十三歳だという事も驚くが、それ以上に今にも掴^{つか}みかかってきそうなこのキツネ顔の態度の方が命司は気になる。もつとも、なぜ不機嫌なのか。その理由はこの廃墟^{はいきょ}を見れば、おおよそ理解出来る気がするが。

「まあええ、取り敢^あえず名前からや。俺はユート。ユート・ユーゼン。で、こっちのロリガキは、サラ・アフメドや。お前は？」

不機嫌ながらも、しかし理性的な雰囲気^{にじ}を滲^{にじ}ませて、その狐男？ユートはそう訊^きいてきた。

「違うから！ ロリじゃないから！ 結婚できる歳だからねあたしは！」

ロリガキ？？もとい、サラが横から口を挟^{はさ}む。が、再度ユートに睨^{にら}まれて口をつぐんだ。

「え……命司……幸田……命司っす……」

取り敢えず、氷漬けになって身動き取れない身の上だ。不思議なことに氷は解けてこないのだが、寒い事は寒いので、早く解放して欲しい。そんなワケで、命司は素直になるのが得策だと思った。

「エーメイジ・コーダ・メイジッス、か。アホっぽい名前やな」

言つて、ユートはいつの間にか取り出していた手帳に、命司の名前を書き連ねていく。しかし不思議な事に、初めて見るその文字も、命司はどういったものが理解できた。漢字に近いだろうか。表音文字ではなく、明らかに表意文字のようだ。それも、原始的な漢字

?? 歴史や国語で習った『甲骨文字』とかいうものに近い。

とまあ、それはひとまず置いておくことにして、命司は取り敢えず誤りを正さなくてはならない。

「いやいやいや、違うから。俺の名前は『命司』で、苗字は『幸田』。ワカル？」

命司がそう告げると、ユートは顔を上げて命司を睨みつけた。秀麗だが、そのキツネ目が姉を連想させ、気圧されてしまう。

刹那、

「ぐあつ！」

ユートが投げつけたペンが額に突き刺さり、命司は悲鳴を上げた。「あゝあ。今マイスター機嫌悪いからさ、ハキハキ答えた方がいいよ?。」

さんざんユートに罵倒され、反論する度に睨まれたせいか、サラ（二三）までもが冷めた視線を送ってくる。

そして、投げて刺さったペンはそのままに、ユートは新しいペンでさっきのメモを修正していた。

「……で、メイジ・コダ君よ。お前、どこから来たん? ったく、人様の高価な機材破壊しよって。くだらん答えやったら、そのままダイインのカルデラ湖に浮かべたるからな?。」

「沈める、じゃないの? マイスター」

「氷は浮くやろ。まあ見ててみい。ひっくり返って、頭だけ水に浸かんねんから。……もがき苦しむ様が目に見えんで」

「やあん、コワイー! マイスターったら鬼畜ねー!」

虜囚そっちのけで、空恐ろしい会話をしている方々。だがそれでも、聞こえる会話の内容から、元の世界と物理法則は似ているようだと思っただと命司は思った。

「えーと、俺はデスね……」

ここはもう、洗いざらい話すしかない。せつかく姉や現実世界から逃げてこれたのに、ここで死んでは無駄死にだ。

それは、いつの記憶だろうか。

命司の目の前には、だいぶ前に死んだ祖父の姿が在った。

人の良さそうな細い眼差し。命司の容貌は、まぎれもなく祖父譲りだ。

浄衣に身を包んだその姿。祖父は田舎の神社の神主だった。そんな祖父に、命司は色々な事を教わった。その中でも、とりわけ？「そうかそうか、イジメられたか。まあ、そんなに気にするな。人はな？ 自分の下に誰かがいないと気が済まんのだよ」

蝉（せみ）一時雨の中で、泣きじゃくる命司を膝に抱き、本殿の階段に腰掛ける祖父は、命司の頭を撫でながらそう言った。

「そんなのやだよ！ ボク、悪い事してないもん！ どうしてボクがイジメられるの？」

人生という名の苦行競技会にエントリーしてから五年目ほどで、初めて経験した理不尽。それを承服できる術も、理解できる道理も、幼い命司は持ち合わせていない。

「それに耐えられんのだったら、じゃあ、お前が強くなるしかないなあ…… 幸い、お前は声に力がある。その使い方を、祖父ちゃんが教えてやるのか？」

「…… ちか…… ら？」

泣くのをやめて、命司は後ろの祖父の顔を見上げた。

「古来、日本には言葉に魂が宿ると信じられてきた。それを『言霊』という。祖父ちゃんはな、その使い手なんだぞ？」

何を言っているのかなんて、幼い命司には半分も分らない。でも、それがあんなら。それができるのなら、大好きな、祖父のようになんか？

「そうしたら…… いじめられない？」

「それは、お前が正しく使えたら、な。……祖父ちゃんの言うこと守れるか？」

「うん！」

命司が力強く頷くと、祖父は愉快げに、そして嬉しそうに笑った。

意識が、浮上していく。

懐かしい祖父の姿は遠く消え去り、

「じい……ちゃん……」

現実が、ふいに命司を包んだ。

（どこだ、ここ……？）

ぼやけた視界がハッキリとしてくると、命司は自分が金属製で円筒形の小部屋に入っている事に気付いた。いや、『入っている』、というよりは、『詰まっている』という表現がより正しい。さらに言えば、『詰まっている』のではなく、『詰め込まれている』という状況なのだが。

体育座りで手足の伸ばせない狭させまの中、視線の高さよりも少し上に、明かりの射し込む窓がある。膝が壁につかえて伸ばせない両足の代わりに、命司は両腕を床に突いて、身体を微かに持ち上げた。

そして、その先に見えたもの？ いや、見えた『者』は？

（やっぱりか）

そこにいたのは、数人の白衣の男と、林立する機械の群。そしてその中心に堂々と立つのは、誰あるう命司の姉の安和あんなだ。命司の八つ年上で二十七歳。だが、既にその社会的地位は確立すてされている。狂徒大学教授であり、世界でも屈指くっしの量子物理学博士。それが命司の姉だ。

性格も顔立ちも、正に『雌狐』といった形容がぴったりの女。

実家の借金苦を物ともせず、自分だけ密かに家庭教師のバイトで金を貯め、奨学金しょうがくきんで大学を出て、この若さで博士にまで登り詰めた。紛れもない天才であり、それだけなら尊敬にも値する。の、だが？？

「あら、オハヨー、マイブラザー」

安和の口が動くと同時に、頭上のスピーカーから声が聞こえた。相手はバイト先の客ではない。命司は遠慮なく怒りを爆発させる。「テンメエーっ！ また拉致りやがってゴルアアア！ 俺を何回テメーの実験材料にすりゃ気が済むんだよ！」

そう、この状況と酷似した状況に、命司は何度もさらされてきた。安和の研究は『量子テレポート』。昔のハリウッド映画で、『ハエと合体しちゃう博士』が研究していたテーマだ。

そしてこれまでに、それに付随する人体実験の材料として、命司はムリヤリ『貢献』させられてきた。

正体不明の新薬を注射されたり、身体の一部を量子化されたり、

この間も、『並行宇宙』とやらの誰かと脳内文通させられたばかりだ。

「素直じゃないなあ、マイブラザー。いい？」

口の端を歪（ゆが）め、一安和は右手人差し指を立てて、左右に振ってみせた。

「今回は、記念すべき最後の人体実験。その被験者にキミは選ばれたんだヨ？ この超天才量子物理学博士・幸田安和様のネ！」

額に浮かぶは怒りの証。姉の超絶自己中発言に、命司はとうとうキレた。

「コーダアンナサマノネ！ ……じゃねえこのマッドサイエンティストが！ いいか？ 俺はこれからバイトなんだよ！ さっさと解放しやがれクソ姉貴！」

「ああ、ヒドいわマイブラザー。せっかく、何の取り柄もない平凡な専門学校のアンタが、歴史に名を残せるチャンスを与えてあげてるのに……姉さんの愛を拒絶する気？」

手弱女（たおやめ）っぽく身体をくねらせ、わざとらしく涙を見せる安和。その態度も気に入らないが、何よりこんなヤツと姉弟（きょうだい）だという事が、命司は一番許せない。

「ああ！ ああ！ 確実に名前残るだろうよ！ 量子テレポートだかの、世界初の事故の犠牲者^{ぎせいしや}だって事でな！ つか、頼むから俺で実験すんのはヤメてくれ！ マジで俺は忙しいんだよ！ ったく、オヤジ達の借金苦から、テメーだけ勝手かつ華麗^{かれい}にフェードアウトしやがったクセに！」

嫌味^{いやみ}、懇願^{こんがん}、ついでに恨み^{うら}の文句を並べ立て、命司は狭い窓^{せま}にべったりと頬^ほを押し付けて姉を睨^{にら}んだ。

「身内だからいいんじゃない。他人だったら万が一の時、人道的に問題あるでしょ？ それに、親の借金で子供^{りふじん}が苦しむのは理不尽だわ」

しらっと涼しい貌^{かお}で、安和は微笑^{ほほえ}んで見せる。

知らず、命司の額に数本の青筋が浮き上がった。

「身内の方が問題あるよボケえ！ つか、マジやめろよ！ マジでバイトあんだって！」

猛り狂^{たけ}う命司。だが、安和の次の言葉が命司を一瞬^{あせん}啞然^{あぜん}とさせた。「ああ、今日行けないって連絡^{れんらく}しといたし。それに、これでも姉として、あんたの将来心配してんのよ？ その歳でスデに負け組に片足突っ込んでるアンタを、あたしが人類の未来の為に役立たせてあげようと思ったんじゃない」

啞然とした状況から、再び額に浮き上がる血管の群。それは一瞬で強度限界を超えてしまった。命司の額から一筋赤いものが吹き出し、覗^{のぞ}き窓^{まど}をステキな赤色に染めていく。

（このアマああああ……！）

社会に出て、何度も何度も耳にし、何度も何度も浴びせかけられた言葉、『勝ち組』『負け組』。それをこの期^こに及んで、実の姉から浴びせられるとは。

「大きなお世話だこのヤロウ！ まだ負け組だって決まってねえだろが！ つか、身内ならオヤジ達の借金なんとかしてやれよええっ？ 勝ち組様^ほよお！」

そう吠^ほえつつも、しかし命司は姉の立ち位置？？その一点だけは

分からない訳でもなかった。元々、宗教にハマった叔母おばの保証人になった、お人好しの親父おやじが悪いし、マヌケな話だとも思う。そのせいで、祖父の死後に相続した神社は人手に渡り、当の両親は外国に出稼ぎでかせ中で、一家離散状態なのだ。

だがそれでも、姉の態度は身内として許せない。

命司の剣幕けんまくに、安和は苦笑くしやうを浮かべた。そして、直後にそれは嘲笑ぢやうじやうへと変わる。

「やれやれ…… ったく、だからアンタは負け組脳だつてのよ。いい？ この実験が成功したら、どんだけの金が入ってくるか分かってる？ ハッキリ言つて、ザックザクのウツハウハよ？」

安和の言葉は正論には違いない。金持ちになれる。その可能性も否定はしない、しかし、それでも譲れないものが命司にはある。

（だからって、弟で人体実験していいってコトにはならないと思いますよ？ オネエサマ？）

命司の一番身近な存在に、金に取り憑よ（つ）かれた一亡者がいたという訳だ。そして、社会の『底辺』を知っている命司としては、大金持ちという存在は遠く、なりたいたいと思わない。命司はただ、日々の暮らしに困らない程度、更に言うのなら？

「知らねえよ！ 分かりたくもねえし！ 俺は学費稼かせぎたいだけなんだよ！ 分かったらサッサと俺を帰せブス！」

憤懣ふんまんを言霊ことだまに乗せ、命司は放はなつた。

だが、命司の不用意な罵詈雑言はじぞうげんに、安和は刹那せつな、不敵な笑みを浮かべて見せた。

そんな姉の貌かおを見て、命司は思い出した事がある。嫌な汗が額ほほから頬を伝つたって落ちていく。

（…… そうだ、姉貴、言霊に耐性たいせいあつたんだつた）

過去に数回試した結果、安和は命司の声の力『言霊』の存在に気付き、命司の言葉に身構えるようになった。つまり、最初から気構えを持って聞けば、命司の言霊は効力を失う。その程度程度の能力なのだ。

そして、放った言葉は案の定、姉には全く効かず、それどころか、むしろ彼女の感情を逆撫でする結果となった。

安和は額に青筋を浮かべると、周囲の助手達にその笑顔を向けた。
(ヤバイヤバイヤバイヤバイ！)

満面の笑みで、助手に何かの指示を出す安和。その貌の下には、明らかに弟への怒りが埋まっている。

「んじゃ、さつさといっちゃいましょーか」

刹那に唸る機械群。

「お、おい、マジやめろよ……」

不安と恐怖が入り交じり、命司の口からこぼれて落ちた。だが、実弟の懇願にも姉の笑顔は崩れない。

安和は命司に向けて口を開いた。まるで、不安な幼子を優しくあやすかの様に。

「ダイジョーブだって。犬とネコは戻ってきたから。……ミルクしか飲まなくなっちゃったけど」

「ダイジョーブじゃねえよソレ！ 幼児退行してんじゃねーか！
つか、人格崩壊するかもだろソレ！」

「ダイジョーブだって。ジューブン微調整繰り返したんだからあ」
「ダイジョーブじゃねえよ！ 微調整でなんとかなる問題じゃねえからソレ！
つか、ハエとか一緒に入ってねえだろうなっ？」

「あ、さつきカマドウマみたいの入ったかも。まあ、いつか」

通称『便所コオロギ』のセクシーに黒光りするあの背中を想像しながら、命司の全身に戦慄が走った。

「どうせならバツタがいいです！ 是非バツタにチェンジして下さい！
それ今すぐ！」

錯乱、いや狂乱し、命司の口をついた的外れの最後の懇願？？というより、むしろ哀願も？？

？？姉の笑顔には届かなかった。

「……んじゃ待ってるわよ？ 愛しのマイブラザー」
ウインクと共にキスを投げってくる姉。

鳴動する機械群。

やがて、命司が入っている機械の中に、淡い光が満ちてくる。

光は粒子となり、それが、元々自身の身体を構成していたものと悟った時??

「テンめええ！ 憶えてろゴルアアアア……」

そう言い置いて、命司の意識は遠のいていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4670z/>

マレビトの楽園

2011年12月16日07時51分発行